

『近江学研究』

生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作 後編

永江 弘之・大原 歩

生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作 後編

永江 弘之・大原 歩

Name :

NAGAE Hiroyuki, OHARA Ayumi

Title :

An Interview-Based Fact-Finding Survey of the Life and Culture of Ogi and the Making of karuta (picture cards for a traditional Japanese game) Featuring the Omi Countryside: Part Three

Summary :

Ogi, Otsu, Shiga Prefecture, a rural farming area set in the lush countryside, has a history that goes back over 1,000 years. I carried out an interview-based fact-finding survey of the life and culture of Ogi, speaking with people between 60 and 90 years of age who live in the area. Based on the data collected I produced the “Ogi Furusato Karuta” (Ogi Countryside Cards). In this, the second half of my study, I will outline my reflections on the educational and informative dimensions of this project and the practical application of “Ogi Furusato Karuta.”

第一章 はじめに (担当：永江)

本研究のフィールド、滋賀県大津市仰木は、西は比叡山を背に、東は琵琶湖を見下ろす山麓に位置し、上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木の四つの字からなる大きな農村集落である。集落を階段状の棚田が取り巻き、背後に雑木林や山林が続く里山は、日本の原風景とも呼べる景観を今も残している(図1)。平安期から「仰木庄」として知られ、氏神の小椋神社は延長五年(九二七)に『延喜式』の式内社に選ばれており、千年以上の歴史がある集落である。

仰木地域は、固有の豊かな文化資源を脈々と今に伝えている。棚田・里山をはじめ、歴史、伝承、祭り、信仰、交流、生活様式、民俗、風習、道具、自然といったものが融合して、「仰木の暮らし」をかたちづくっている。

一方で、圃場整備や開発によって里山の姿は大きく変わりつつあり、高齢化などの現代的課題の深刻化とともに仰木も今、急激な変化の中にあることは否めない。それでも現在の仰木にはなお、かつての日本の里山に息づいていた心惹かれる魅力が



たくさん詰まっております。そこには、効率化を優先した現代の都市型社会において失われつつある価値観が生きている。

本研究は、仰木集落の六〇歳以上の方からの聞き取り調査をベースとして、昭和二〇年代～四〇年代の里山の生活文化を目に見える形で共有できる「ふるさとカルタ」としてよみがえらせる試みである。成安造形大学附属近江学研究所で平成二二年度（二〇一〇）から三カ年計画で取り組んだ近江学研究「里山・水と暮らし」の第二期「生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作」として、平成二三年度（二〇一一）、二四年度（二〇一二）に仰木地区で実施した調査・研究活動である。

本稿では、後編として「本研究活動の教育的・啓発的な側面の考察」と成果物である「仰木ふるさとカルタ」の活用について報告する。なお、前編・中編の報告は「成安造形大学附属近江学研究所紀要 第3号」（平成二六年三月発行）、「成安造形大学附属近江学研究所紀要 第4号」（平成二七年三月発行）に掲載している。

第二章 調査・研究の目的 (担当：永江)

本研究では、高度経済成長で「物質的豊かさ」と引き替えに切り捨ててきたさまざまな素材や道具、生活思想、自然観などに目を向け、住民聞き取り調査等を通して人々や集落の記憶・思い出の中に息づく「今は見ることでできない情景」「現代に名残をとどめる情景」「暮らし（生活文化）のかたち」を掘り起こし、仰木固有の風土や文化、暮らしの情景を浮き彫りにして記録すること、および、それらの内にひそむ美しさ、かけがえのなさ、心の豊かさを再発見し、未来につないでいくためのツールとして、記録した言葉や情報をビジュアル化して、世代や地域を超えて多くの人が共有できる「ふるさとカルタ」を制作することを目的とした。

本研究には、大原歩、加藤賢治と私の三名の研究員に加え、成安造形大学学生十二名が研究スタッフとして参画し、一貫して活動した。成果物もさることながら、学生たちが地域と深く関わり、聞き取り調査からカルタ制作までをチームとして担うという形の研究手法の確立を重要視し、本研究における教育効果に期待した。

また、思い出の聞き取りをベースとした手法は、近年、高齢者の認知症の予防として取り組みや研究が広がっている「回想法」と密接に関連している。心理療法のみならず、世代間交流や地域活動などの活性化の効果が指摘されており、語り手であ

る「高齢の方が元気に活動的になれるだけではなく、聞き手である若者の活力や成長にも大きな効果が見られる」と言われている。人生経験豊かなおじいちゃん、おばあちゃんと話すことは、本などからの知識よりずっとリアルで心に響くのかもしれない。そうした意味でも、「ふるさとカルタ」の取り組みが、「過去と現在と未来をつなげる」「世代をつなげる」「地域をつなげる」「いのちをつなげる」、そうした総合的な地域発展につながっていけばと考えた。

第三章 「仰木ふるさとカルタの聞き取り調査・

制作活動」の教育的意義 (担当：永江)

本研究の特徴の一つは、研究員だけの研究ではなく、学生が主要なスタッフとして参加する点である。しかし、本研究は単位化した授業ではなく基本的に学生スタッフはボランティア参加とした。仰木の方と連携する上で、柔軟に対応し、学生参加の研究手法を探りながら取り組みを進めていく必要があると考えたからだ。当初、一年程度の研究期間を予定していたが、二年間という長期に渡ることとなった。幸い、スタート時点で四年生の学生はいなかったため、全員がカルタ完成まで活動することができた。

三「学生スタッフの募集時に示したビジョン

企画概要と到達目標

本研究活動の企画概要と到達目標として、主に以下の点を伝えて、学生スタッフを募集した。これらの文面は、募集メールやガイドンスプリントから抜粋し整理した。

1. 暮らしを聞き取り、人々が育んできた知恵・文化・風習などを「ふるさとカルタ」として「かたち」にする試みです。思い出や記憶という目に見えない情報を、子どもから大人までが見て遊べるカルタに仕上げ、世代を越えた地域のつながりを再生する。これは、成安造形大学ならではの活動です。

2. 暮らしのかたちを再現し、気持ちやいのちをカルタにつづす。自分で納得のいく取材をして、「人の想いに添う」イラストレーションの制作に実践的に取り組みます。仰木の人たちをクライアントと考えて、相手の想いを汲んで表現する姿勢を学ぶことや「伝えること」の難しさ「伝わる」よろこび、活動を通して広がる人や地域とのつながり、「仰木ふるさとカルタ」の商品化など、さまざまな面で実践的に得るものは大きいと考えます。

3. 仰木の人たちにとって、積み重ねてきた自分たちの歴史や生活のこと、守り育んできた棚田や祭りのことが、「カルタ」という形になって残ることで、仰木のみなさんに共通する「地域の誇り」になるかもしれません。うまくいけ

ば、仰木の人たちが「宝もの」のように大事にしてくれるかもしれません。

4. 聞き取りをベースとした「ふるさとカルタ（思い出カルタ）」制作の手法は、近年、高齢者の認知症の予防や進行抑制として取り組みや研究が広がっている「回想法」とも密接に関連しています。回想法の実践効果は、心理療法のみならず、世代間交流や地域活動などの活性化が指摘されています。表面的には「認知症の予防」などの意味がありますが、思い出を語り合い、そこから生まれてくる人生の深さを感じとっていくことに回想法の深い意義を見いだすことができます。ご高齢の方がお元気に活動的になられるだけではなく、話をする若者（高齢の方から見ればほとんどが若者です）が確実に変わり、元気に成長すると言われています。

5. 仰木のの人にとっても、学生にとっても初めての取り組み、研究員（教職員スタッフ）にとっても初めての挑戦。試行錯誤しながら、研究スタッフ（学生を含む）全員で確かな手応えのある活動にしたい。

6. みなさんと共に、仰木における人々や集落の失われつつある多くの記憶を掘り起こし、それらの内にひそむ美しさ、かけがえのなさ、心の豊かさの再生につながるような研究としたい。そしてこの研究活動を通して、命の営みに触れ、人と自然の有機的な関係を学ぶことで、みなさん自身の造

形表現の原点を見だし、より豊かでより広くより深い視点を持つことがひとつの目的です。

7. 制作した「仰木ふるさとカルタ」を使用して、仰木のコミュニティづくりの一助となるような取り組みを計画していきたいと考えています。例えば、小学生とおじいちゃん、おばあちゃんが一緒にカルタ会をする企画。カルタを使った「仰木を語る会」の開催。「仰木の語り部」のような機能を持った組織・担い手づくりのきっかけにならないだろうか……。ささやかですが、夢は広がります。

研究活動を終え、「仰木ふるさとカルタ」の活用をすすめている現時点で振り返ると、本研究の企画段階や学生募集段階のビジョンや期待した効果はほぼ実現し達成できたように思う。これによる、学生への教育的成果も大きい。

三二 学生スタッフの実践的な学び

集まった学生スタッフは、イラストレーションを学ぶイラストレーションコースの学生八名と、建築・インテリア・ランドスケープなどを学ぶ住環境デザインコースの学生四名だった。本学のイラストレーションコースでは情報を絵で説明し伝えることを学び、住環境デザインコースではフィールドワークなどを通して自然や歴史・文化との関係から課題を探り、人が幸せになる住環境を考える。いずれの学生にとっても、本研究活動は専門性を活かす教育の場として実践的な学びにつながったと

思う。

私は「教育とは、せざるを得ない状況を、いかに工夫してつくり出すか」と考えており、本研究活動において、さまざまな「せざるを得ない状況」が学生に行動を起こさせ、それによりさらに興味が深まる（モチベーションが高まる）という「場」を提供できたのではないかと思っている。

本研究活動を通して、学生は主以下のような内容を学び、教育的成果が達成できたと考えている。

1. コミュニケーション力。とりわけ「話を聞き取る力」

授業や体験学習で学ぶことや作品制作のための技術などは、一度学べば身につくというわけではない。学んだ内容を日常的に活用できる力（日常力）にするためには、反復することが必須である。

本研究の聞き取り調査では、単に話を聞くだけではなく、話を記録し、理解し、想いのこもった絵にするために共感し、そして絵として視覚化・客観化する、そういう話の聞き方を何度も繰り返し行なった。他者の話を深く聞き取る力、共感する力が身についたと思う。

2. イラストレーションを描く力

絵を描く行為は、作品表現のためだけではない。「記録、確認、伝達」のための絵、コミュニケーションツールとしての絵は、さまざまな場面で活用されている。そうした「日常的に絵を使いこなす力」は美術を専門に学ぶ学生のみな

らず、全ての人に有用であり、多くの人が身につけたいと願う力である。

本研究では、聞き取り調査の記録として学生は多くの挿絵つきのメモを残した。記録としての絵であると同時に、自分の理解を客観化し、語り手に見せて確認できる形にしている。また、聞き取り後のスタッフ同士の情報交換でも文字や言葉だけでなくも格段に伝わりやすく検証しやすい。絵と文字と言葉と身振りなど総合的な表現によるコミュニケーションが必要な状況が本研究の特徴の一つで、活動を通して繰り返し絵を描くことで絵を活用する日常力が養われたと言える。

また、絵札原画のための聞き取りでは、アイデアスケッチや下絵を仰木の方々に見せながら修正を重ねた。私(永江)との作品面談を重ね、原画を完成させていった。一般的に絵画作品は一人で、自分のイメージだけで仕上げ、発表後に他者の視点からの感想や評価を受けることが多い。一方で、カルタ原画の制作では、絵柄は「素朴で親しみやすいもの」、内容は語り手(仰木の方々)の思い出の情景や気持ちを表現するという他者との連携で目的に合った絵づくりに進めていった。クライアントから注文を受け目的に応じた絵を仕上げるイラストレーションの制作手法を実践的に学んだ。

3. 時間をかけてステップを積み重ねひとつのものを創りあげる力

カルタの完成まで数多くのステップがあった。例えば、学生の最初の仕事は、一八五枚のアンケートにびっしりと書かれた手書きの文章を分類しながらテキスト化する作業だったが、学生の感想コメントを抜粋すると「アンケートで得たものが膨大で多岐にわたっていたので、最初は果然としました。」「思っていたよりテキストの量が多くて不安になりましたが、じっくりカテゴリ分けを進めていく中で少しずつ仰木の昔の暮らしに詳しくなっていくのが楽しかったです。」とある。チームとして協力して段取りを決めて手分けし、自分の仕事をやり遂げることで全体の成果が着実にまとまっていくことが実感できたと思う。そして、これらの成果の結晶として「仰木ふるさとカルタ」という商品が完成し、販売され、また「仰木ふるさと物語」という五感体験アンケートやふるさとマンガラをまとめた冊子も発行され、最後までやり遂げた確かな手応えが自信になったと思う。

4. 地域のことやそれぞれの居場所を大切に考える姿勢

仰木という地域に入り、その土地の「人、もの、こと」に接しているいろいろなことを知った。土地の記憶とも言える人々の思い出を、精一杯理解し共感を持つてふるさとカルタという「かたち」に結実させた。そうした関わりを通して

て、学生は「仰木は第二のふるさとのような存在になりました。」と感想に書いたり、今自分が暮らしている地域との比較でさまざまなことを感じ、考えている。そうしたことで、これからの地域活性化の担い手としての芽が育まれたと思う。また、子どもから高齢者まで我々が生きる場として「家庭、学校、会社、サークル、地域、日本、世界：」といったさまざまな居場所について、何が大切か、どうすれば人が幸せに暮らせるかを考え実践する姿勢を育めたのではないかと思う。

5. 多様性のある価値観を理解する力

里山の生活文化の聞き取り調査は、都市型の価値観の中で育ってきた学生にとって、全く違った価値観との遭遇である。一般的には全く違った価値観を共感を持って理解したり受け入れることは容易ではないが、本研究では「思い出」という具体的な暮らしの様子を聞き取ることで仮想体験を通して他者の価値観を肯定的に理解しやすい。里山の暮らしの中で育まれてきた価値観を理解し、それらの内にひそむ美しさ、かけがえのなさ、心の豊かさを感じ取ること、それに加えて他者の抱えている価値観の多様性に気づくことができたと思われる。価値観の多様性の理解は他者を尊重する気持ちにつながり、ひいては、自尊感情を高めることにもつながるだろう。

三三三 学生スタッフの活動報告

本研究活動を振り返ってのコメントなど

平成二五年(二〇一三)にカルタが完成した後、学生スタッフに活動報告として本研究活動を振り返って「五段階評価シート」と「コメント・まとめシート」を書いてもらった。そこから学生の学びを読み取ることができるので簡単に紹介する。

三三三 五段階評価シート

「五段階評価シート」(表1)では、本研究活動を十四のステップに分け、それぞれのステップごとに「活動前の不安」「活動前の期待」「活動後の満足度」「自身の変化や成長」という項目について、「1=低い・小さい」「2=やや低め・小さめ」「3=どちらとも言えない」「4=やや高め・大きめ」「5=高い・大きい」の五段階で評価してもらった。「不安」の項目はマイナス評価とし「1」から「5」とした(数字の意味は同様)。また、十五番目の項目として「2年間の研究活動全体の評価」を入れた。

表1を参照してほしい。数値は平均値を表示した。各ステップの活動参加(評価)人数はまちまちである。

各ステップの「活動前の不安」を比べると、「11. 京都新聞の@キャンパスの記事編集」の不安が1.4・2で一番高く、次いで「6. 下絵から原画制作・完成」「4. 生活文化・読み札の聞き取り調査」の順で高い。人との関わりの中ではじめて取

表1：学生スタッフの活動報告「5段階評価シート」の集計

活動のステップなど	回答項目	平均	1	2	3	4	5
1. 応募時と研究活動終了後の比較	不安	-2.6					
	期待	4.1					
	満足度	4.6					
	変化や成長	4					
2. 事前学習(仰木祭り、映像鑑賞など)	不安	-2					
	期待	4					
	満足度	4					
	変化や成長	4					
3. 五感体験アンケート～ふるさとマングラ	不安	-2.7					
	期待	3.3					
	満足度	3.9					
	変化や成長	3.6					
4. 生活文化・読み札の聞き取り調査	不安	-3.3					
	期待	4.1					
	満足度	3.9					
	変化や成長	3.6					
5. 絵にするための聞き取り調査	不安	-2.7					
	期待	3.7					
	満足度	4					
	変化や成長	3.7					
6. 下絵から原画制作・完成	不安	-3.9					
	期待	3.6					
	満足度	4.3					
	変化や成長	4.4					
7. コスモロジー展の準備など	不安	-2					
	期待	3.5					
	満足度	3.5					
	変化や成長	3.3					
8. 食のWS(聞き取りと納豆餅づくり)	不安	-2.5					
	期待	4.5					
	満足度	4.5					
	変化や成長	3.8					
9. わら草履づくり	不安	-2.7					
	期待	4.3					
	満足度	5					
	変化や成長	4					
10. 手づくり味噌づくり	不安	-2.3					
	期待	5					
	満足度	4.8					
	変化や成長	4					
11. 京都新聞@キャンパスの記事編集	不安	-4.2					
	期待	4					
	満足度	4					
	変化や成長	4					
12. 仰木夏祭りで聞き取りWS	不安	-2.7					
	期待	3.3					
	満足度	4					
	変化や成長	3.3					
13. 印刷会社アインズ工場見学	不安	-3					
	期待	4.3					
	満足度	4.3					
	変化や成長	3.7					
14. OC、ホームカミングデーでカルタ遊び	不安	-2.4					
	期待	3.8					
	満足度	4					
	変化や成長	3.4					
15. 2年間の研究活動全体の評価	満足度	4.4					
	心残り	-3.1					
	変化や成長	4.1					
	プロジェクトの意義	5					
地域活動の興味・関心		4.7					

五段階評価は、1＝低い・小さい、2＝やや低め・小さめ、3＝どちらとも言えない、4＝やや高め・大きめ、5＝高い・大きい、で評価してもらった。
「不安」と「心残り」の項目はマイナス評価とし、「1」「5」とした(数字の意味は同様)。
左表は、それぞれの項目の平均を示している。

り組むことやその責任に対する不安感が読み取れる。
それに対して「活動後の満足度」は、おおむね4以上で満足度は高かった。
「15. 2年間の研究活動全体の評価」では、満足度は4.4と

高く、「プロジェクトの意義」は全員が5、今後も地域に関わる活動の機会があればやってみたいという「地域活動の興味・関心」も4.7と非常に高く、今後の活躍に期待したい。

三三三 三 コメント・まとめシート

「コメント・まとめシート」から一部だが学生スタッフの実感のこもった印象的なコメントを抜粋する。

1. 応募時の気持ちについて

・形があって、用途のあるものを作れるのではないかと期待がありました。そして、多くの人にふれてもらえるのではと思いました。また、思い出や記憶を再現する際にたくさん資料をあたるのではと予想しました。説得力のある、ごまかしのきかない事実に基づいたイラストレーション制作に挑戦できると思いました。活動を通して、地元の方々と話していくうちに、自分とかけ離れた遠いものを絵にする意義のある活動という思いから、もっと身近なものに変化しました。肩の力を抜いて、意義云々を抜いて、楽しく参加できたと思います。

・一年生の時から仰木や里山、自然に関係するプロジェクトに参加してきた中で、仰木の自然・生活・人とのつながりの魅力を知り、より深くそのことについて知りたくなったから。また、昔はあつて今はなくなつたこと、今でも残っていることなどその生活の変化に興味があつたから活動を通して、仰木の方がどれだけ仰木を大切に思っているかをじかに感じる事が出来て、わたしも自分の生まれ育つた街のことについて知りたいと思うようになった。

2. 五感体験アンケートからふるさとマンダラの作成、読み札聞き取りまでについて

・五感体験アンケートのテキスト化は、わからない言葉が多くて理解せずに文章化する作業は大変でした。聞き取り調査は何を質問すべきか考えるのが大変でした。聞き取りの最中でも、実物がないのでおぼあちゃんたちの言葉を自分の中で想像しながら理解していけないといけませんで

した。自分が見たことのない風景を理解するのはとても困難でした。それにおぼあちゃんたちも次から次へ話してくれるので行くと必死でした。理解しているつもりでも、私が思っている風景とおぼあちゃん達の頭の中にある風景はきつと異なっている。話を聞いていると、本当の事がわからないもどかしさがありました。また言葉で風景を伝えあうことも難しかったです。

3. 絵札制作とその聞き取りについて

・あれだけ根気よく作品に取り組んだことがなかったのととてもいい経験になりました。手直し手直しの繰り返しは最後の方は正直こたえましたが、下絵の確認をお願いちゃんやおぼあちゃんにしていたときに「そうそうこんなだった!」と言ってくれたことが励みになりました。絵札の制作では、今はもう残っていない情景を描かないといけなかったもので、仰木の方の思い出と私の想像のつじつま合わせが難しかったです。また、例えば「ゆお」の絵札だと、年代等によって材質の認識が違つたり今現在存在している農具小屋との思い違いがあつたりと、最終的な絵にたどり着くまでの修正が大変でした。何度も聞き取りを重ねるうちに、絵を見て懐かしがっていたり派生した思い出話が聞けたりして、そういった反応が見られるようになってくると大きな達成感を感じました。

4. 体験・ワークショップなどについて

・当初はカルタの制作だけをするプロジェクトだと思っていて、こんなに色んな体験をさせてもらえると思っていなかったのですがとても有り難いことだと感じました。味噌作りや納豆餅作り、藁草履作りなどは自分一人ではなかなか作れないものを作ることが出来、楽しく新鮮な体験になりました。特に印象に残っているのは京都新聞社さんの記事制作で、自分

の絵が新聞に載るとは思ってもみなかったのもとても嬉しかったし、記事制作の手順も知ることができて勉強になりました。

・聞き取りで聞いていたことを実際に体験できて、話や絵がより真実味を増したと思います。納豆餅も自分で食べることでどんな食感なのかも分かります。おいさんおばあさんたちと感覚を共有できるようになったと思います。味噌作りでは自分で味噌を作れると聞いた時は驚きました。味噌は買うのが当たり前で、ものすごく特別な何かが必要なものだと思っていたからです。技術も必要などころがありました。工程をみると意外とシンプルで、自分が味噌作りに関われたと思うと感動しました。

5. 仰木ふるさとカルタの役割とは？どのように活かされると良いと思うか

・カルタができたときは大変うれしく思いました。ですがこれが本当に何かの役に立てることが出来るのかどうかは全く分かりませんでした。このあいだ仰木の里小学校でカルタ会をしたとき、このカルタはこうやって楽しむためにあるのだと感ずることが出来ました。合間に昔はこんなことをしていたなどお話をすることで子どもたちも驚きもして、知ることの楽しさを感じられたのではないかと思います。そこから子どもたちの興味を広げていくきっかけづくりをすることがこのカルタの役割になるのではないかと思います。子どもたちは自分と身近な話に反応が良かったように思います。遊び方(魚つかみ)や昔の子どもの仕事(水汲み)の話などです。

・一番の役割は、世代間の交流の手助けだと思っています。今回私自身、かるたを通しておいちゃんおばあちゃんとふれあってみて、昔のお話を聞くのがとても新鮮でおもしろかったし、おいちゃんおばあちゃんもこのプロジェクトを通して色んな思い出話を喋ってくれて、お互いに楽しく交流することが出来ました。話のネタになるだけでなく、仰木といういろいろな歴史の残る地区を語り継いでいくのにも一役かってくれる

カルタになると思っています。納豆餅など仰木固有の伝統もあれば、日本のいろんな地域で受け継がれてきた伝統も描かれているので、仰木以外の地域でもカルタが世代間の交流に活かされたり、もっと言えば地域間の交流にもつながっていくととても嬉しいです。

・世界的に珍しいと思うから世界遺産に登録したり、文化遺産にするけれど、日常的な出来事を残していこうとするのは、なかなかないと思います。しかし、柳宗理が茶碗や箸などの民芸に対して高い評価をしていたように、日常にあるからこそ美しいもの、面白いものがたくさんあるのではないかと思います。しかもこうした出来事は世界遺産・文化遺産とは違って実際に自分たちの生活に結びついていたことなので、より親近感のもてることではないでしょうか。昔の暮らしに対する理解を遊びながら多くの人と深めることができ、後世に語り継いでいくことができる、遺産だと思っています。今の時代だからこそ昔の話をカルタを通してながら考え、多くの人と語り合える場を作ることに活かせたら良いと思います。

6. あなたにとって仰木とはどのような存在ですか？地域や人と関わることに

・地域や人と関わることで、似た土地、環境であっても、人々の、特においちゃんおばあちゃんたちの元気のの違いで地域の印象がこれほど変わるものだと思います。あと地域に誇りがあるかどうかということも、自信があるかないかは、とても重要なことだと思います。仰木は特別な地域だと思います。だからこそ、おいちゃんおばあちゃんたちが元気なのだと思います。

・仰木の方の生活や自然とのつながりを知り、仰木を大切にする思いを感じること、わたしも自分の生まれ育った街を大切にしたいと思わせてくれた存在。普段の私の生活の場とは異なる雰囲気を持ち、緩やかな時間が流れる仰木という場所が私にはとても魅力的だった。外からみる仰

木と内からみる仰木の違いを聞き取り調査等を通じて感じ、仰木の伝統を守っていききたい年配の方と、個の無い中で生活は出来ないと言う若者のどちらの思いも知ることが出来た。カルタを制作することで若者は昔の生活がどういうものだったのか知る機会が出来たと思う。年配の方も若者も今と昔の違いを知り、今あるもの・今続けていることがこれ以上無くならない良いと思う。

・同じ世界に住んでいても、自分の居場所によってこんなにも暮らしが異なることを知った。せわしなく生きている人、穏やかに生きている人、ひっそりと生きている人など様々な人が居る。自分の居場所で見んなそれぞれ自分の生活をしている。自然の本当の良さを心から感じ、知ることが出来れば人間中心の考えは減る。自然に活かされている、大地に人間が住まわせてもらっている、と少しでも思う事が出来れば、むやみに何も考えず建物を建てたりしない。紙一枚だって木から出来ている。将来モノを作っていく立場に立つなら、自然の重みに適うモノをつくりたい。

・約二年間を通して仰木と関わってみて、第二のふるさとのような存在になりました。棚田や仰木祭りなど、これから残していくべき財産も多く、いろんな場所にとんだん発信していける地区でもあると感じました。現代ではあまりかんじることのできない昔ながらの生活や人と人との結びつきが残る素敵な地域であり、地元の人とのつながりもできたので、大学を卒業してもお祭りに行ったりカフェをのぞいたり、関わり続けていきたいと思っています。

・私は仰木を第二の故郷の様に感じています。最初は全く知らない人たちだったけれど、一緒になってプロジェクトやイベントをしていく中でお互いのことを知ったり思いやったりできました。一つの集落の良さを見つめていくにはそこに住む人たちがどのように生きているのか何を考えているのか知ることがとても大切なのだと感じました。もともと「まちづくり」に関心があった私は、地域を良くしていく活動をしている人た

ちとたくさん出会い、そんな人をつなげていく橋渡し役のような立場に居たいと思うようになりました。

7. その他

・仰木の里小学校でのカルタ会を終えて

学年別のチームに分けたことで、同じくらいの強さの友達と対戦出来たのでよかったと思います。「難しい字があるからこのカルタやだー」と言われてしまう事もありました。自分の知らない字があると不公平な気持ちになってしまふのかもしれない。最初に難しい字があるよと教えたのは良かったと思いますが、意識しすぎてお手つきしてしまった子もいました。お手つきしてしまふのもゲーム性があるということで面白いとは思っています。次回のカルタ会も今回のように説明をきちんとすればいいと思います。ヒントで取ってしまふ子がいましたが、分かった時についていうルールをつけたのだなと思います。最初に手は体の後ろに組んでというルールをつけたと守らないといけないという意識になり、お手つきも減ったように思います。話声で読み札の音が聞こえないことがありましたが、時間が進むにつれて真剣さが増すとみんな聞こうという気持ちが強まり、すぐに静かになれるようになったと思います。合間に絵札のお話をするときは、子どもたちの生活により身近なものに良く反応してくれたと思います。当時子どもがどうであったのかという目線で話が出来る机が増えればより良い付加価値が良くなると思います。

三十四 教育プログラムとしてのカルタ制作

二つの実践事例「高島市思い出かるた」と「仰木ふるさとカルタ」の比較

教育プログラムとしてカルタ制作を考える上で、学生の在学

期間を考えると二年間の研究期間はやや長い。本研究の三年前に九ヶ月の期間で取り組んだ先行事例との比較を通して、プログラムの組み方の幅を広げておきたい。

平成二〇年（二〇〇八）六月～翌三月にかけて学生と共に取り組み、滋賀県高島市社会福祉協議会との受託連携事業「高島市思い出かるた」の制作を、本研究と比較してみる。

「高島市思い出かるた」は、依頼を受けた段階で社会福祉協議会およびデザインサービスセンターの職員が聞き取りをすすめており、「読み札」の文言はすでにできあがっていた。研究活動の内容は「読み札をもとにした聞き取りをし原画を制作、製品としてデザインする」ことまで。学生は絵師として参加し、研究・制作期間は約九ヶ月だった。読み札を絵にしていくために、「きらり高島デザインサービスセンター」を学生が五回ずつ訪問して、利用者の方々に話を聞きながらカルタ原画を仕上げていった。読み札をもとにした「地域に共通する思い出の情景」の再現を目指したため、聞き取りの対象は「訪問した日のデザインサービスセンター利用者の方」とした。常に一定数の地域の方々が居られるので、学生の都合に合わせて訪問日を設定できるメリットがあった。また、駅から徒歩で行ける場所であったことも、個々の学生が授業のないときに聞き取り訪問を計画しスケジュールを組むことができ、比較的スムーズに研究を進めることができた。

一方、本研究では、本学附属近江学研究所から仰木学区老人

クラブ連合会に協力を依頼し、研究活動の内容は「ふるさと五感体験アンケートを実施、それを整理して仰木の生活文化を概観できるふるさとマンガラを作成、それをベースに聞き取り調査をして読み札決定、絵札のための聞き取り調査をして原画制作、商品としてデザインしカルタ完成」まで。研究・制作期間は約二年間だった。前者と比べて研究活動が長期に渡った理由は、生活文化の聞き取り調査から始めて読み札をつくるまでの部分の期間であるが、農村の特性である一年間の暮らしのサイクルも大きく関係している。仰木では兼業農家が多く、農作業や水路の管理などにおいて高齢の方々が元気に現役で働いておられる。また、祭りのことや山林の保全・伐採なども同様で、老人クラブのみなさんも一年を通して大変忙しい。そのため、「田植えや稲刈りといった繁忙期の後に法事などいろいろあつて、その後やなあ。」という感じで、老人クラブのみなさんに集まっていたり、ただ時期を限定せざるを得なかった。また、バスの便が少なく平日に授業と両立する形で個々に学生が訪問するのは難しく、日時を決めて地域の方に集まっていたり、ききスタツフそろって訪問し聞き取り調査などを行う形をとった。そのため土日を使ったスケジュール調整をした。

その他の点も表2で比較しているのでご参照いただきたい。

仰木ふるさとカルタのケース	高島市思い出かるたのケース
また、実体験として、納豆餅づくり、わら草履づくり、手づくり味噌づくり、京都新聞夕刊「@キャンパス」に「次世代へ 結の心をつなぐ」の記事編集・掲載、俵編みの実演、蜂の子ごはんを食べる など。	高島歴史民俗資料館を見学し、昔の生活道具などをスケッチしたほか、昔の風景の名残のある場所を数カ所回る。
9. 絵札原画制作の留意点 「ぬくもり」を伝えるために、すべての絵札に必ず「人」を入れることにして、画材はアナログ画材に限定し、色鉛筆や鉛筆による線描き、水彩絵具やアクリル絵具で着色した。	9. 絵札原画制作の留意点 「必ず人を描き入れて、親しみやすいかたにしてください」という希望があった。聞き取りをした実感をもとに、アナログ画材、デジタル画材の選択も含めて各自が自分の絵柄で制作した。
10. 作品面談（永江からアドバイス） 各学生 5～12回ずつ	10. 作品面談（永江からアドバイス） 各学生 2～5回
11. カルタ製品化 絵札 48枚、読み札 48枚 札のサイズ 120×85mm (合紙により厚さ約0.9mm) パッケージサイズ 176×125×60mm 同梱：仰木のくらし解説 A3 両面カラー 部数 初版 300 部、第2刷 400 部 販売 2,800 円（税別）	11. カルタ製品化 絵札 48 枚 札のサイズ 148×10mm (ポストカードタイプ) パッケージサイズ 210×155×15mm 同梱：読み札一覧を含むブライヤー A4 両面モノクロ 部数 25 部 販売 なし
12. 展覧会などによる発表 ・展覧会 「仰木 水と記憶のコスモロジー」 平成23 年10月23日～11月27日 成安造形大学【キャンパスが美術館】 ライトギャラリーにて 本展は、聞き取り調査のまとめまでの中間発表として開催。 ・展覧会 「仰木ふるさとカルタ原画展～在りし日の里山のくらし」 平成25 年10 月29 日～12 月1 日 成安造形大学【キャンパスが美術館】 G 棟103（ライトギャラリー横）にて 本展は、カルタ完成後、研究活動全般及び成果発表として開催。 ほか	12. 展覧会などによる発表 展覧会 「高島市思い出かるた原画展」 平成21 年8 月23 日 高島市民会館 玄関ホール 本展は、ニッセイ財団高齢社会先駆的事業シンポジウム『ふるさと絵屏風で 地域のまちづくり』基調講演：茂木健一郎（脳科学者）の関連展示として開催。

表2：カルタ制作の2つの実践事例の比較

仰木ふるさとカルタのケース	高島市思い出かるたのケース
1. 研究・制作期間 2年間 平成23年4月～平成25年3月 2. 依頼 本学附属近江学研究所から仰木学区老人クラブに協力を依頼する。 3. 研究活動の内容 ふるさと五感体験アンケートを実施、それを整理して仰木の生活文化を概観できるふるさとマンダラを作成、それをベースに聞き取り調査をして読み札決定、絵札のための聞き取り調査をして原画制作、製品としてデザインしカルタ完成まで。 4. 教職員スタッフ 永江弘之、大原歩、加藤賢治 (いずれも、近江学研究所研究員) 5. 学生スタッフ イラストレーションコース 8名 住環境デザインコース 4名 6. 聞き取り調査の方法 読み札決定のための聞き取り(仰木の生活文化の掘り起こし)と、絵札制作のための聞き取りの2段階。いずれも、土日などに4地区ごとに自治会館などへ老人クラブの方数名～10名程度集まっていたいて、スタッフでそろって訪問して聞き取り会。 7. 聞き取り訪問回数 ・読み札決定までの聞き取り会は 9回 そのうち各学生 3～7回参加 ・絵札制作のための聞き取り会は 5回 そのうち各学生 1～4回参加 8. 絵札制作までのその他の活動 ガイダンス、仰木祭り見学、仰木の里山映像鑑賞、五感体験アンケート整理及びふるさとマンダラ作成(12回)、展覧会準備(3回)など	1. 研究・制作期間 9ヶ月間 平成20年6月～平成21年3月 2. 依頼(受託連携事業) 高島市社会福祉協議会から本学芸術文化交流センターに依頼される。 3. 研究活動の内容 読み札は社会福祉協議会およびデイサービスセンターの職員が聞き取りをすすめてすでに完成した段階で、研究活動としては、読み札をもとにした聞き取りをし原画を制作、製品としてデザインするところまでを担当。 4. 教職員スタッフ 永江弘之 (イラストレーション教員) 5. 学生スタッフ イラストレーションクラス 10名 6. 聞き取り調査の方法 絵札制作のための聞き取りのみ。個々の学生スタッフが授業のない時間帯(土曜も含む)に「きらり高島デイサービスセンター」を訪問し、その日の利用者の方に読み札をもとに聞き取りを行う。 7. 聞き取り訪問回数 絵札制作の聞き取りのみ各学生 5回ずつ 8. 絵札制作までのその他の活動 ガイダンス、打合せ(3回)など

第四章 「仰木ふるさとカルタ」研究成果のまとめと

活用（担当：大原）

四一 冊子「仰木ふるさと物語」制作

四一―一 仰木ふるさと物語とは

「仰木ふるさと物語」は、この「仰木ふるさとカルタ」を制作する初めの作業として仰木学区老人クラブ連合会のご協力により実施した「仰木ふるさと五感体験アンケート」で回収した一八五枚のアンケートの記述をまとめたものと、その記述内容を図解化した「仰木ふるさとマンガラ」を集録した冊子として、永江弘之、大原歩が編集・執筆した。

膨大なアンケートの記述からは、仰木の方々の多様な生活や物語る記憶が手に取るように伝わり、その思い出を冊子にまとめることで、次世代に記録を残すことを目的とした。

四一―二 形態・表記について

形態は、A4サイズ（縦二一〇ミリ×横二九七ミリ）を横版・右開きとした。横版にすることで、アンケートの文章を縦書きに読みやすくし、また、仰木ふるさとマンガラをなるべく大きく掲載できるよう意図した。

アンケートでは五感それぞれの項目で記入していたが、本書ではそれらの記述を「仰木ふるさとマンガラ」を作成する際に分類、整理した形で掲載している。全てのアンケート

トの記述を内容（エピソード）によるまとめりで十二のカテゴリー（同じような性質のものが含まれる範囲）に分け、さらにそれぞれの内容から共通のキーワードを探ってグループ化した形で掲載している。分類整理については、テキスト入力を担当した研究スタッフが判断した。言葉遣いなどは、原文のままテキスト化するよう心がけた。しかし、手書き文字が読み取りにくい部分や誤字と思われる箇所は、研究スタッフが解釈して修正を加えた。

アンケートの執筆者情報等の表記は、氏名の記入があった場合も個人情報観点から氏名は掲載せず、以下のように表記し、情報として検証できるように工夫した。

・文末のかつこ内に、上から順に（在住地、アンケートを回収した二〇一一年時の年齢、性別）と記した。

・仰木地区では、在住地である字によって風習に違いがあるため、その比較にもなるように在住地を示した。また、年齢や性別の表記もコメント内容を理解するために重要と考えた。

・かつこの後の番号は、一八五枚のアンケート番号である。

この番号によって原本のアンケート資料を辿れるように表記した。（写真1・2）

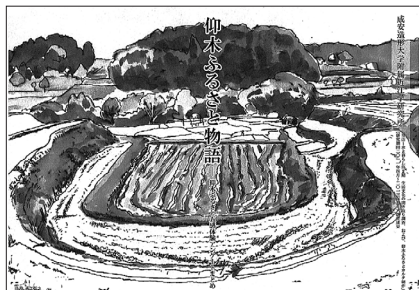


写真1:「仰木ふるさと物語」(表紙)

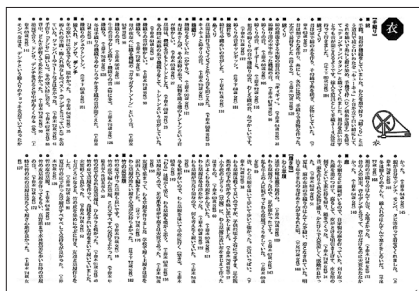


写真2:「仰木ふるさと物語」(紙面)

四二 「仰木ふるさとカルタ」の活用

「仰木ふるさとカルタ」が二〇一三年四月に完成し、その後、地元地域や滋賀県下の地域からの依頼などにより、「仰木ふるさとカルタ」や原画などを活用する活動がスタートした。二〇一六年一月までに活動した内容を年度ごとに以下の項目順にまとめた。

- 1、展示・販売
- 2、カルタ会
- 3、展覧会・展示会
- 4、研究活動発表・講演会
- 5、授業

四二一 平成二五年度(二〇一三)

■展示・販売

- ① 成安造形大学オープンキャンパスにて展示・販売
4月28日、5月18日、6月9日、7月28日、9月8日
主催・会場・成安造形大学

② 仰木祭りにて展示・販売 5月3日

会場…大津市立仰木小学校前
担当…永江・大原・小林・鈴木・後藤

■カルタ会

① 「カルタお披露目・カルタ会」 5月18日

主催…成安造形大学附属近江学研究所
会場…成安造形大学
担当…永江・益・日下部・後藤・小林・鈴木・長野・宮本
成安造形大学創立二〇周年記念「セイアン・ホームカミングデー2015」にて、「仰木ふるさとカルタ」のお披露目とカルタ会を開催した。制作に関わった学生が参加し、卒業生や大学関係者へカルタ会を通して研究活動の成果を伝えた。
(写真3)

② 「仰木ふるさとカルタ大会」 6月29日

主催：大津市立仰木の里小学校PTA・仰木の里東小学校PTA
 会場：大津市立仰木の里小学校体育館

担当：永江・大原・日下部・後藤

仰木の里小学校と仰木の里東小学校各PTAの依頼により、「子ども会」にてカルタ大会を行った。「仰木を知ろう」というテーマで、前半一時間は、仰木太鼓保存会少年部の子どもたちによる「仰木太鼓」の体験レクチャー、後半は仰木の暮らしを学ぶ「仰木ふるさとカルタ大会」を実施。カルタ大会では、研究スタッフで当時空間デザイン領域四年の日下部



写真3：カルタのお披露目・カルタ会（セイアン・ホームカミングデーにて）

③ 「仰木ふるさとカルタ大会」 8月3日

主催：仰木ふれあい夏祭り実行委員会・成安造形大学附属近江学研究所

会場：大津市立仰木太鼓会館

担当：永江・梅下・鈴木・日下部・益・小林

仰木ふるさとカルタのお披露目として、仰木ふれあい夏祭りにて「仰木ふるさとカルタ大会」を行った。会場となる仰木



写真4：仰木の里小PTA・里東小PTA子供会でのカルタ会



写真5：カルタの解説を行う学生スタッフ

まこさんと後藤美子さんが司会進行やカルタの解説を務めた。参加した子どもたちを年代別に四グループに分け、各グループに校長先生や親御さんに入ってもらい補佐いただいた。（写真4・5）

④「新年カルタ会」 2014年1月1日、2日

主催・会場…里湯昔話 雄山荘

大津市雄琴の温泉旅館「里湯昔話 雄山荘」にて「新年カルタ会」。旅館からの依頼により、新年の企画としてカルタ会



写真6：仰木ふれあい夏祭りにてカルタを一緒に作り上げた老人クラブさんとのカルタ会



写真7：1番多く札を集めた人にプレゼントする学生スタッフ手作りの「カルタメダル」

太鼓会館にカルタの制作過程や、完成したカルタの原画などを展示するブースも設営した。カルタ大会では、カルタの制作にご協力いただいた仰木学区老人クラブ連合会長の堀井さんにカルタの解説をしていただいた。三ゲームを行い、小学生・中学生・親世代・おじいさんおばあさんたちと学生とがみんなでカルタを楽しんだ。カルタ大会で勝った人には学生が手づくりしたカルタメダルを授与した。(写真6・7)

■展覧会・展示会

を実施。研究スタッフは参加しなかったが、ホテル内にカルタ制作過程を解説するパネルを展示した。また、カルタの販売も行った。

①展覧会 「仰木ふるさとカルタ原画展」在りし日の里山のくらし」 10月29日～12月1日

主催…成安造形大学附属近江学研究所
会場…成安造形大学【キャンパスが美術館】G棟103（ライトギャラリー横）

開学二〇周年記念事業 二〇一三秋の芸術月間SEI AN ARTS ATTENTION VOL. 5「Site s i f u ころのありか」の展示として、研究活動「仰木の生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作プロジェクト」の二年間にわたる調査・研究活動の成果をまとめ、カルタ原画や仰木でむかし使われていた民具や野良着などに共々展示した。また、読み札作成の際にご協力いただいた畦草（いけくさ）会（仰木の俳句の会）の山村修三さんと飯田一枝さんにカルタを読み上げていただいた音声会場に流した。抑揚をつけカルタを読み上げる声につつまれた会場で、五感で味わう展覧会を意図した。

展示協力…仰木学区自治連合会、大津市立仰木小学校、仰木学区老人クラブ連合会



写真11：カルタの読み札を高らかに読み上げる飯田一枝さん

仰木ふるさとカルタ原画展 一在りし日の里山のくらし

琵琶湖のやみ雲がなす山に囲まれた千年以上の歴史を誇る農村集落「大津市仰木」。
本郷は、その村の中心で、200年にわたり職を継ぎ作り出した「仰木ふるさとカルタ」原画49枚と、関連する史料や資料などを展示します。



2013年10月26日(土)～12月1日(日) 12:00～18:00 入場無料
休館日＝11月11日(月)～15日(金) 11月10日(日)は、作家・研究スタッフが在廊します。
会場 成安造形大学【キャンパスが美術館】G棟103 (ライトギャラリー横)

写真12：展示会場内D.M

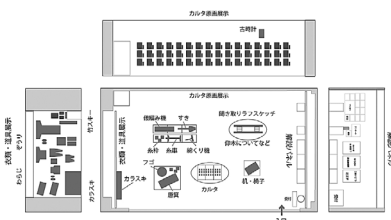


写真13：展示会レイアウト図



写真8：仰木小学校から借用した道具は手入れをして展示



写真9：展示レイアウトを考える



写真10：会場に流す音声の録音を行う山村修三さん

技術協力：成安造形大学 情報メディアセンター
音源録音・編集・オーサリング：五十嵐亮介
(写真8～15)

②展示会 仰木学区文化祭「仰木ふるさとカルタ原画展」

11月2日、3日

主催：仰木学区文化協会

会場：大津市立仰木太鼓会館

■研究活動発表・講演会

①「仰木人権教育研究会」 11月6日

主催：仰木人権教育研究会 人権学習・地域教材を考える部
会

会場：成安造形大学 I棟プレゼンルーム
担当：加藤・大原



写真14：展示風景



写真15：展示風景



写真16：人権教育研究会にて、カルタの完成に至る経緯を発表



写真17：展示会場の見学も行う

仰木人権教育研究会は、仰木・仰木の里学区の幼・小・中・高等学校および本学の教職員が会員で、地域の教育教材について学ぶ講座を年に一度実施されている。担当の仰木の里小学校の先生がカルタに関心を持たれ、近江学研究所の地域における役割や、研究活動の経緯・完成したカルタについて発表し、展覧会「仰木ふるさとカルタ原画展」在りし日の里山のくらし」の見学を行った。

・発表 「近江学研究所の活動について」 加藤賢治
・発表 「仰木ふるさとカルタができるまで」 大原歩
(写真16・17)



写真18：仰木の里西自治会から依頼にてカルタの解説をおこなった



写真19：仰木独自の食文化、納豆餅づくりを教わる

②「仰木の里西自治会 交流会」 11月16日

主催…仰木の里西自治会

会場…成安造形大学 I棟プレゼンルーム

担当…永江・加藤・大原

仰木の里西自治会が年に一度開催する交流会として、仰木の暮らしを学びたいと依頼があり、展覧会の解説・仰木ふるさとカルタ会・仰木の食文化を体験する「仰木の納豆餅づくり体験」を行った。納豆餅づくりは、仰木ふれあい青空市に協力をお願いし西村ナツエさん、北川純子さんに作っていた。近江学研究所からは、カルタの制作過程や研究活動の取り組みについて解説を行った。(写真18・19)

③平成25年度新採職員フォローコース「近江地元学研修」

10月21日、22日

主催…滋賀県政策研修センター

会場…大津市立仰木太鼓会館

滋賀県の新採用職員対象の「近江地元学研修」の研修先として仰木地区が選ばれ、仰木学区老人クラブが職員研修を受け入れた。二日間のプログラムの中で、仰木ふるさとカルタ会を開き、昔の仰木の暮らしを伝えるツールとして活用された。

■授業

①仰木の里東小学校 総合的な学習「タイムスリップ 昔のくらし」 2014年2月5日

主催…大津市立仰木の里東小学校 三年生担当教員

会場…大津市立仰木の里東小学校

担当…永江・大原、仰木地区から滝川幸作さん・山村修三さん・上坂澄子さん・深田よし乃さん

十一月の「仰木人権教育研究会」に参加した仰木の里東小学校の鈴木先生から、担当学年の授業に活用したいと依頼があった。大原が仰木の方たちをコーディネートし、仰木の里東小学校三年生対象の総合的な学習の一環の授業の特別講師として参加。仰木ふるさとカルタに出てくる昔の暮らしについてお話し、児童たちが事前にまとめた疑問や質問に答えた。

(写真20～23)



写真22：熱心に聞き取りをする子どもたち



写真20：子どもたちから質問をうける山村修三さんと
深田よし乃さん



写真23：授業の風景



写真21：昔のくらしについてお話をする滝川幸作さん
(中央)と上坂澄子さん(右)

四十二 平成二六年度(二〇一四)

■展示・販売

①成安造形大学オープンキャンパスにて展示・販売 6月8日

主催・会場・成安造形大学

■展覧会・展示会

①展示会 仰木ふれあい夏祭り「仰木ふるさとカルタ 原画展
示」 8月2日

主催・仰木ふれあい夏祭り実行委員会

会場・仰木ふれあい夏祭り会場 大津市立仰木太鼓会館

②展覧会「仰木ふるさとカルタ 布絵本」

7月1日～31日 会場・滋賀銀行本店ロビー

8月2日 会場・仰木ふれあい夏祭り会場 大津市立
仰木太鼓会館

9月4日～27日 会場・成安造形大学 聚英館一階

主催・ボランティアグループ「布絵本サークルさえずり」

大津市のボランティアグループ「布絵本サークルさえずり」

(昭和五七年結成)のみなさんが、「仰木ふるさとカルタ」

を題材に布カルタの作品を制作。二〇一三年七月～二〇一四

年四月の九ヶ月をかけて完成し、二〇一四年七月「滋賀銀行

本店ロビー」、八月「仰木ふれあい夏祭り」、九月「成安造形

大学聚英館1階ロビー」にて展示を行った。手芸好きの十四



写真25：題材により布を染めるところから手づくりで行われている



写真26：8月2日仰木ふれあい夏祭りにてお披露目展示



写真24：仰木ふるさとカルタの題材を布でつくった「布カルタ」

名の主婦のお母さんたちが、一年近くをかけて制作に取り組んだ布カルタは、様々な布をパッチワークのように立体的に組み合わせさせて制作。ひと針ひと針の手触り感のある作品は、表情豊かで温かくやさしい風合いが感じられた。(写真24・26)

③ 展示会 仰木学区文化祭「仰木ふるさとカルタと仰木ふるさとマンダラの展示」 11月1日～2日

主催…仰木学区文化協会

会場…大津市立仰木太鼓会館

④ 展示会 仰木の里学区文化祭「仰木ふるさとカルタ 原画展」 11月8日～9日

主催…仰木の里学区文化協会

会場…仰木の里市民センター

■ 授業

① 「近江学B 地域を知ることの大切さを学ぶ／10週目 仰木ふるさとカルタ」 6月12日

主催…会場…成安造形大学

担当…永江

本学のカリキュラムで近江学研究所が担当する授業「近江学B」において、チェーンレクチャーの十週目に「仰木ふるさとカルタの取り組み」について授業を行った。

② 北大津高等学校 特別講座「仰木の生活文化について」 7月11日

主催…会場…滋賀県立北大津高等学校 国際文化コース

受講生徒数…約四〇名／グループ六か所(六～七名)

担当…永江・加藤・大原

北天津高校国際文化コースより依頼があり、国際文化コース二年生対象の特別講座として「仰木ふるさとカルタ」を用いて仰木の生活文化を知る授業を行う。「近江の里山の歴史」(加藤)について話した後、「仰木ふるさとカルタ」の制作経緯や仰木の暮らしの豊かさについて話し(永江)、カルタで遊びながら絵札の解説を行った。(写真27・28)



写真27: 北天津高校の生徒たち、グループに分かれてカルタで遊ぶ



写真28: カルタに描かれる絵札から昔の暮らしを学ぶ

③仰木の里東小学校 総合的な学習「タイムスリップ 昔のくらし」 2015年2月3日

主催…天津市立仰木の里東小学校 三年生担当教員
会場…天津市立仰木の里東小学校

担当…永江・大原、仰木地区から滝川幸作さん・山村修三さん・上坂澄子さん・深田よし乃さん

昨年度に引き続き、仰木の里東小学校三年生対象の総合的な学習の一環の授業の特別講師を務めた。

四・一三 平成二七年度(二〇一五)

■展示・販売

①成安造形大学「セイアン・ホームカミングデー2015」にて展示・販売 5月17日

主催・会場…成安造形大学

■カルタ会

①三館協同事業〈伝承文化体験事業〉「仰木カルタと紙ひこき」 2016年1月23日

主催…仰木の里公民館・仰木公民館・伊香立公民館

会場…仰木の里市民センター三階

担当…大原

仰木の里公民館・仰木公民館・伊香立公民館の三公民館の協同事業。仰木の里の担当として仰木の里文化振興会が企画した。約三〇名の子どもたちが参加し、仰木ふるさとカルタと紙飛行機づくりを楽しみ、お昼ご飯として地元でとれた野菜の豚汁やおにぎりを食べた。仰木ふるさとカルタで遊ぶ前に、四八枚のカルタに描かれている題材について近江学研究所

(大原) が解説を担当した。カルタ会に使われたカルタは近江学研究所から貸し出した。

■研究活動発表・講演会

①「香港バプテリスト大学 大学見学・ワークショップ」

7月2日

主催…香港バプテリスト大学

コーディネート…NPO法人HCCグループ 浅野智子

会場…成安造形大学 聚英ホール

受講学生数…二四名 受講講師数…二名

発表…大原 講評…加藤・大原

香港バプテリスト大学のグリーンツリーズムツァーの一環として、成安造形大学の見学とワークショップが行われ、その中で「仰木ふるさとカルタ」の取り組みを発表した。また、学生による滋賀県内での経験を「俳句」にしてグループごとに発表を行い、講評を近江学研究所で担当した。(写真29・30)



写真29：カルタの絵札から題材をよみとる学生たち

■授業

①北天津高等学校 特別講座「仰木の生活文化について」

7月10日

主催・会場…滋賀県立北天津高等学校

受講生徒数…約四〇名／グループテーパー六か所(六〜七名)

担当…永江・加藤・大原

昨年度に引き続き、北天津高校国際文化コースより依頼があり、二年生対象の特別講座の講師を務めた。

②教員免許状更新講習「地域の文化と芸術 ―フィールドワークの手法―」

8月20日



写真30：滋賀県でのフィールドワークの成果を俳句で発表

主催…成安造形大学

会場…成安造形大学 生涯学習センター

受講者数…二六名

担当…永江、加藤、大原

今年度（二〇一五年度）から始まった成安造形大学が主催する教員免許状更新講習の講座として実施。幼、小、中、高校、特別支援学校、教育委員会など、幅広い教員が受講。講座内容は「学校と地域の関係が薄れつつあるなか、学校の所在地域について、人々の生活に根付いた文化と伝統を社会学と芸術の観点から考察する。その事例の一つとして大学附属近江学研究所が行った地域調査のフィールドワークを例にとり、実践と手法、活用方法を報告して教育現場での応用につなげる。また同時に、学生と共同で完成させた成果物の『仰木ふるさとカルタ』を紹介して総合的な学習での活用を探る。」というもの。

③ 仰木の里東小学校 総合的な学習「タイムスリップ 昔のくらし」 2016年2月2日

主催…大津市立仰木の里東小学校 三年生担当教員

会場…大津市立仰木の里東小学校

担当…永江・大原、仰木地区から滝川幸作さん・山村修三さん・上坂澄子さん・深田よし乃さん

この授業に関わり三年目となる。仰木の里東小学校三年生対

象の総合的な学習の一環の授業の特別講師を務めた。

四・三 その他

■ 寄稿 2013年2月

大津市立仰木小学校 創立百四十周年記念誌 発刊「仰木

ふるさとカルタの紹介」寄稿

執筆…永江弘之・大原歩

発行…大津市立仰木小学校

編集…百四十周年記念誌編集委員会

大津市立仰木小学校の創立百四十周年を記念して発行された記念誌に制作経緯や完成したカルタの絵札・読み札を掲載することとなり、仰木地区でのカルタへの関心の高さがわかる。

（写真31）

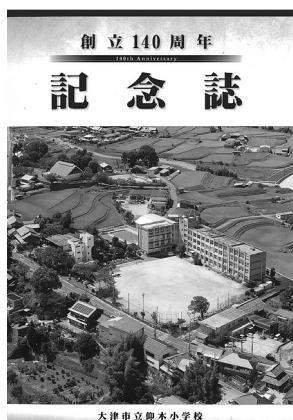


写真31：仰木小学校140周年記念誌表紙

第五章 仰木の人にとつての本研究活動とは

―人に内在する思い出の活かし方― (担当…永江)

これまで学生スタッフに対する教育的な側面を主に見てきたが、本研究活動に参加しご協力いただいた仰木の人にとつて、どのような影響や変化があったか考察してみる。

五―語り手と聞き手の関係性

本研究活動において思い出の聞き取り調査を進めていて、あらためて強く感じたのは「語り手という存在は、聞き手なしには存在し得ない。」ということである。

老人クラブのみなさんが、生き生きとお話ししてくださる一方で、「こんな話でいいんか? わしらは、これが普通やからなあ。」「息子にも孫にもこんな話をするこたないわ。あんたらは一生懸命聞いてくれるので、なんやいっぱい思い出すわ。」とおっしゃっていたのが大変印象深い。我々研究スタッフにとつて、これほどの奥深さと広がりを持つ「仰木固有の風土や文化、暮らしの情景」は、仰木の方々にとつては「日常のありきたりなもの」「あつて当たり前のもの」なのだ。そして、この膨大な思い出は、学生スタッフや研究員という聞き手がいなければ、子にも孫にも誰にもほとんど語られることはなかったのだ。

文章も(絵なども)読者がいなければ何も伝えることができ

ないが、筆者が伝える意志があり書き残せば、書かれた時から時間を経ても誰かが興味を持って読む可能性がある。一方で、語り手は、語り手と聞き手が同じ時空を共有しなければ成立しない。録音で一人語りを残すという方法もあるが、聞き手が共感や信頼を持つて語り手の話を聞くのとは、語られる内容はまったく変わってくるだろう。たとえ相づちだけであっても、聞き手と語り手のダイナミックな相互作用により、たくさんの思い出が生まれ、言葉やエピソードや感情が豊かに語られることになる。本研究の成功のポイントには、語り手と聞き手が上手にかみ合った状況をつくり上げたことが大きい。

語り手の仰木のおじいちゃんやおばあちゃんにとつて、聞き手が地域外の仰木とは全く違った環境で育った人で、孫の世代の学生たちであったことが実は重要だったのだと思う。生活文化が異なる別の価値観を持った外の目だからこそ、その地域の際立った個性や魅力を見いだせるということ。こうした研究において、学生の純粋な興味と驚き、発見が、地域の人の「慣れ」を刺激し、固有の価値を啓く大きな力になると感じた。(写真

五二一 思い出を語り直し、過去を育てる

思い出を語るといことは、過去の出来事や事実を単純にそのまま述べているわけではない。今の状況によって（語り自身の気持ちや誰が聞き手かなどによって）同じエピソードでも全く違った語りが展開されるだろう。いわば、思い出をその都度語り直し、語りを通して思い出をもう一度体験し直すという感じではないだろうか。聞き手に語って聞かせることを通して語り手自身にとっての思い出の意味が変容しているように思える。楽しい思い出、つらい思い出、苦しい、悲しい思い出など、そうした思い出を今どんな気持ちで語るか、また、聞き手がどう受け取ってくれるかによって思い出の意味合いが変わり、つ



写真32：聞き取りの様子

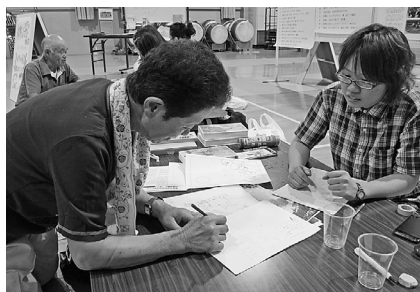


写真33：聞き取りの様子

らい話が笑い話に変容したりする。「思い出す」ということは、単に過去を現在に引っぱってくるのではなく「過去（記憶や思い出）を育てる」というクリエイティブな活動であると言えるのではないだろうか。過去を振り返り、過去を語ること、過去の出来事（体験）の文脈が変化し新たな意味を持つとすれば、それは今の自分が変わるということである。もしかすると語りを通して「過去を育てる」とことは、その人の今を少し幸せにするキーになるのかもしれない。

「ふるさとカルタづくり」は、前述の創造的なサイクルを効果的に生み出し「過去を育てる」というクリエイティブな仕組みだと思う。またその活用は、個人や地域や世代を越えて思い出をつなぎなおし、地域や土地の「記憶を育てる」仕組み。人と人をつなぎ、コミュニティーを再生し、未来につなげていく仕組みと言えよう。

結び（担当：永江）

地域の方々の思い出、生きた言葉を手がかりに生活文化を浮き彫りにし、その中でその土地ならではの特別な読み札を決めていくことから取り組んだ本研究活動では、「地域に入り、地域を学び、地域の方々と共に生き生きと活動すること」の素晴らしさや難しさを学ぶ大きな機会となった。

完成した「仰木ふるさとカルタ」に対してや当時の研究活動

を振り返って、仰木のみなさんからはいろいろな反応が聞かれた。

「一番気になっていた「仰木らしさ」については、当時読み札決定にご協力いただいた畦草会の会長さんから「四八枚の読み札については『あんじょう言うてくれたな』とみんな言ってくる。仰木ならではのカルタとしてほとんどの人が理解してくれた。」とおっしゃっていただけた。「展覧会用に読み札の読み上げを録音したときは、どんなリズムで読むかいろいろ考えた。」「仰木の人は何でも『晴れがましいんで』と控えめで積極性が足らんように思う。でも、聞き取りの時は孫にしゃべるような感じだったからかみんなようしゃべったな。思い出話になると俳句の会でも一句に対してみんな一斉にしゃべる。」など当時を振り返ってお話しされた。また、「他所にお嫁入りした妹たちにカルタを買ってあげた。仰木で育ったことがなつかしいと、みんな喜んでくれる。」「聞き取り資料を見返して、みなさんがこんなにたくさん書いてくれるのを見て感動した。」「うれしゅうて、何回も読み返したら覚えてしまった。」「カルタを見ると、読み札以外にも仰木にはこんなことやあんなこと、まだまだたくさんええことがあるなあと思う。例えば食だけでも四八枚までできるで。」「ええのん作ってくれた。仰木の宝ものやなあ。」など、いろいろな方からお声をいただいて、本当にやり遂げて良かったと思えた。

しかし、本研究活動や「仰木ふるさとカルタ」が本当の意味

で真価を問われるのはこれからなのだと思う。カルタが家庭や地域の中でどう活かされて「仰木固有の風土や文化、暮らしの情景」をどう次世代につなげていくのか、世代を越えたコミュニケーションを結ぶツールとして仰木やその他の地域で積極的に活用されることを期待したい。また、本研究活動に携わった学生スタッフたちは今、全員が本学を卒業し社会人として一歩を踏み出している。ファンシーグッズのデザイナー、車のフロアマットなどのデザイナー、広告制作、漫画家のアシスタント、地産地消の間伐材などを利用した木製家具の工房、建築設計事務所、まちづくりセンターを拠点にNPOの活動をサポートしまちづくりを推進する仕事、タウン誌の編集など、それぞれの生き方を通して人や地域や社会と関わっている。彼らがそれぞれの居場所を大切にして今後さまざまな形で活躍していくこともまた、本研究活動の成果と言えるのだと思う。

謝辞

本学近江学研究所周員の大原歩氏と加藤賢治氏が、本研究の共同研究者である。大原歩研究員は、学生の頃より仰木をフィールドとした「地蔵プロジェクト」という研究チームで活動し、仰木公民館に務めていた経験もあり、本研究において大学と仰木をつなぐ役割を担っていただいた。学生への指導、研究活動のサポート、研究の記録（録音、撮影）等、本研究を推進する上で欠かさない存在であった。加藤賢治研究員は、「仰木・堅田の祭礼」を研究してこられ、特に上仰木での調査に多大なご助力をいただ

いた。また、仰木在住のたくさんの方々のご協力なくして、本研究の取り組みはあり得ない。聞き取り調査にご出席いただいた仰木学区老人クラブ連合会の方々、わら草履づくりや納豆餅、手づくり味噌などをご指導いただいた方々、読み札と一緒に推敲してくださった仰木の俳句の会「畦草会」の方々など、総勢五十名以上に及ぶ方々が学生と温かく接してくださり、多大なご協力をいただいた。他にも一八五通のアンケートを記入してくださった方々や仰木で出会った多くの方々に、ふるとカルタへの期待と励ましの応援をたくさんいただいた。ここに感謝の意を表する。

調査・制作協力

仰木学区老人クラブ連合会、俳句の会「畦草会」、仰木学区自治連合会、津市立仰木小学校、大津市立仰木市民センター、仰木ふれあい夏祭り実行委員会

学生スタッフ（敬称略）

梅下菜々美、益友花子、兼森絢子、日下部まこ、小池由華、後藤美子、小林佳紫、鈴木沙季、関戸望、長野明代、永禮尊大、宮本暖子 以上十二名が学生スタッフとして研究を支えた。あわせて、感謝の意を表する。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第5号

発行日 平成28年3月24日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937